

女郎花田樂の拵へかた

豆腐を田樂の仕立に、青串にさして、醬醬へ胡椒の粉を少し合せたるものを、さつと、はけにて引、焼くべし、さて粟の粒を蒸籠にてひしたるをふりかけて出すべし。

小のき日記 (三十三年七月生男兒)

印 東 お と な

明治卅四年十二月 此頃中云ふことは

うま(馬) かうこ(香物) タッチャン(父) チャ
アチャン(母) わか(犬の名) ニヤ(猫) プ(湯)
イタイ モー(牛ノ泣色)等なり

馬はと問へばウンと体をゆする

犬の吠ゆるを嫌らひ「イタイ」としがみつく
四日。母と母の友人の家へ行きしに初の程は「ゴ

イコ」と言ひて玄關の方へ行き母を困らせし
も程なく狎れてその愛息(七ヶ月ほど)を抱かんと
て兩手を廣げ餘念もなく乳呑み居るを後より抱く
歸へりに味柑を深山戴き風呂敷に包しみに其れを
引づりながらサツと歩みゆく故御挨拶はと言
ひしに立ち歸へりて頭を疊につけ丁寧に辭氣を爲
し再び包をさげ母の袖を引ばる

五日。先頃より母の乳首を齒にてきづつけし爲吞
まさぬやうすれど吞みたがりて困る乳首に藥紙を
張りしに其を見ては「イタイ」と首をふり吞ます
夜中片方を吞み未だのまんといふ例の痛き方を
吞まさんとせしに「イタイ」といひて吞ます
六日。「ト、シロ」と言ひ母のふところを開け
乳を吞む

兵隊さんと言へば直に「ブ」といふ喇叭を吹くこ

とならん又一二といへば兩手を固めて上下す

七日。夜母と親戚の家へ行きしに大泣きに泣き出

し皆々困るをこゝにして家に歸へる寐衣に着更

へさせんと裸にせしに心地よげに小用を飛ばし

「アー」とため息をもらし固く兩手に握り居りし菓

子を食べ初む

八日。傳に負はれ母と外出せしに途に車夫参りま

しようと言ひしに頭をふる猶参りましようと言ひ

しに「ウン〜」とうなり首をふる虎がするといふ

やうに

八日。夜中しげ〜小用に起きるなり今夜も小用

すみて床に入り母の方先に眠りかけしに「バアバ

ア」と言ひて人差指にて母の臉を開ける

痛き方の乳を呑む時は氣毒そうに二口三口呑みて

は「イタ〜」と母の顔をのぞく

* * * * *

ふみ子 (三十二年三月生)

十二月一日。母の雑誌を読み居る側にありて人と

言ふ字を是は何と言ふ字と尋ねし故人と答へしに

「アラ人ジャナイワ字ヨ」といふ

二日。弟の泣きしに泣く人には蜂がさす笑ふ人に

は福が飛んでくるといふ

五日。昨日母の友人の許にて貰ひし味柑を與へん

と大きな方をふみ子に小ささを弟にといひて與

へしに取らず小ささを取る何故とも分らざりしに

午後又味柑を與へしにまた小ささを取る

(ガラ〜)の中より指輪の出しと言ふ話をせし事

あり其の爲ならんか

八日。母弟らと淺草へ用たしにゆく例の通り馬車

まで往復歩む